

萩原朔太郎の動物のイメージと内的体験

—D. H. ロレンス、ニーチェとの比較研究

田 中 雅 史

Hagiwara Sakutarō's Animal Images and Interior Experience
—a Comparative Study with D. H. Lawrence and Nietzsche

Masashi TANAKA

Abstract

Many images of animals are found in Hagiwara Sakutarō's poems. He mixed these images with human ones. He expressed his sexual impatience, loneliness and longing for beauty through animal images such as flapping butterflies, swimming bacteria, barking dogs and so on.

Such characteristics can be seen in the works of Nietzsche, by whom Sakutarō was greatly influenced. Using animal images like a snake, an eagle, a camel, a lion etc., he conveys nuances of his value judgments. Sakutarō's usage of animal images displays the same characteristics.

Besides, I think Sakutarō utilized animal images to express something outside the stereotyped humanity. D.H.Lawrence, who was also greatly influenced by Nietzsche, used the image of a sloughing snake to describe the process of changing the mode of living. Sakutarō's creepy animal images may have the same function.

In order to ascertain this point, I analyze his long poem, "Hibarinosu" or "The Skylark's Nest". This poem includes the image of breaking eggshell. The interior experience described here is miserable, but there is a flicker of hope in this poem, especially in the images of eggs.

The image of a sloughing snake or breaking of an eggshell can be regarded as lonesome efforts by writers who try to get out of the inflexible reality. They use animal images to express something outside the stereotyped humanity.

はじめに

萩原朔太郎の詩には、動物、植物、昆虫などのイメージが多く見られる。それらは美術でいうグロテスク模様のように、異常に気ままでふざけたやりかたでお互いにからみ合って、非日常的世界を現出している。この論文では、朔太郎のこうしたイメージの特徴を分析し、それを西洋の文学・哲学に見られる同様のイメージと比較してみたい。

1 朔太郎、ニーチェ、ロレンスの動物のイメージ

(1) 萩原朔太郎の動物のイメージ

まず、萩原朔太郎の詩から動物、昆虫などのイメージを試みにいくつか取り出して、その特徴を見てみよう。たとえば、「すべての娘たちは 猿に似たちひさな手足をもつ」¹⁾ (「寝台を求む」)、「[女の指が] まるでちひさな青い魚類のやう」²⁾ (「その手は菓子である」)、「[都会の夜に眠る] ただ一疋の青い猫のかげだ／かなしい人類の歴史を語る猫のかげだ／われの求めてやまざる幸福の青い影だ。」³⁾ (「青猫」)、「私の心が「羽ばたき」して、それが「小鳥の死ぬる時の醜いすがたのやう」で、その「たへがたく悩ましい性の感覚」は恐ろしく憂鬱だ⁴⁾ (「恐ろしく憂鬱なる」)、などのようなものがある。一見して子供っぽい、生き物に対する執着がはっきりしているが、それだけではない。今無作為に選んだ範囲から言えることは、人間のイメージがそれと混ぜ合わされているということだ。

最初の例などは、なぜすべての娘の手が猿に似ているのか説明できないが、説明できないものを強引に結びつけることによって効果を挙げている。次の例は女の指と小魚が、しなやかさの点で結ばれている。同様のものに女の襟足を魚に例え、「その魚類の半襟のなかでおよいでゐる」、「ぬらぬらとした魚類の音楽」と表現しているものもある。⁵⁾ (「その襟足は魚である」)

次の青い猫のイメージは、動物のイメージ (特に犬と猫のイメージ) を作者

1) 『萩原朔太郎全集』第一巻 (新潮社、昭和34年) 126頁。

2) 同書、132頁。

3) 同書、134頁。

4) 同書、140-41頁。

5) 同書、224-25頁。

自身の分身として使うという朔太郎の詩によく見られる特徴を示している。このことについては清岡卓行が『萩原朔太郎『猫町』私論』の中で、詳しく論じている。彼は『月に吠える』の犬のイメージについて、それは「犬の生理を、残酷に透視する写実」であると同時に「詩人本人の意志を暗鬱に映しだす象徴」であるという「合金性」をもつイメージだと言っている。⁶⁾自分自身を動物のイメージで表現したものは、他にも例えば次のようなものがある。

かくて私は詩をつくる。燈火の周囲にむらがる蛾のように、ある花やかにしてふしぎなる情緒の幻像にあざむかれ、そが見えざる實在の本質に觸れようとして、むなしくかすてらの脆い翼をばたばたさせる。私はあはれな空想兒、かなしい蛾蟲の運命である。⁷⁾ (『青猫』序)

朔太郎は詩論の中で、プラトンのようなアイデアに言及することが多いので、この部分もアイデアを追い求める詩人を光に集まる蛾に例えたものと考えられる。

最後の例は、性的な衝動に駆り立てられる焦燥を、死ぬ時にもがいて羽ばたく小鳥に例えている。たいへん朔太郎らしい表現である。ほかにも山奥の寂しい灯りを「花やか」と言い、そこに「むらがりつどへる蛾」、「光にうづまき眩き押しあひ死にあふ小蟲の群團」の中に自分にも通じる「ふしぎな性の悶え」や「あはれな 孤獨の あこがれきつたいのち」を重ねている例もある。⁸⁾ (「花やかなる情緒」)

このように今見た範囲では、朔太郎の動物のイメージを使った比喻（区別すると煩雑なので、昆虫・鳥・微生物なども動物に含めることにする）には、人間や人間が内部に感じ取ったものが一方にあって、その人間的なものが動物的なものと混ぜ合わされるという特徴がある。彼は自分自身の性的焦燥や孤独や美への憧れなどを、羽ばたく蝶や泳ぐバクテリア（「ばくてりやの世界」）や月夜に吠える犬などを通して表現する。ではなぜこうした主観的な体験の表現と動物のイメージが結びつくのかを次に考えてみたい。

(2) ニーチェの場合との比較

朔太郎も影響を受けたニーチェも、主観的体験を動物のイメージを使って表

6) 清岡卓行『萩原朔太郎『猫町』私論』(文芸春秋社、昭和49年) 123頁。

7) 『萩原朔太郎全集』第一巻、117-18頁。

8) 同書、196-97頁。

現している。ニーチェの動物のイメージの使い方を検討して、朔太郎の場合を考えるきっかけにしようと思う。彼は思想的にも修辞の特徴の点でも朔太郎に影響を与えているので、比較は有効だろう。中でも彼の『ツァラトウストラはこう言った』⁹⁾には、蛇と鷲というツァラトウストラの二匹の動物をはじめとして、多くの動物のイメージが見られる。この二匹の動物は、本文中に書いてあることから人間のもつ賢明さ（蛇）と勇気（鷲）をあらわしているようだ。また近代的平等思想の持ち主は毒蜘蛛タランチュラとして、ツァラトウストラを非学問的であるとして無視する学者は羊として描かれている。平等を説くものは優れたものへの復讐心を、タランチュラが猛毒をもつようにもち、羊は危険な認識には踏み込まない臆病さをもつからである。「三段の変化」の章では、精神はラクダ、獅子、幼子の順に変化するとされている。はじめは多くの古い価値の重みをすすんで担っていたものが、古い価値を引き裂いて、自分の新しい価値をつくり出すという変化を、このように動物のイメージを使って表現しているのである。『ツァラトウストラはこう言った』は、こうした主観的内容の表現であるような動物のイメージを除いたら成立しないだろう。

さて、今とりあえずニーチェの動物イメージの絵解きを試みたが、実は動物のイメージは、それ以外のやり方では表現できない主観的判断のニュアンスを伝えるからこそ使われているのだ。最後の例で言うと、ラクダは重いものを背負えるとともに、どこか愚鈍な感じを与える。これは、古い価値にとらわれている人物が忍耐力を持つ一方、その価値の欠陥を見抜けず愚直に担うという滑稽さをも持つというニーチェの判断を表わしている。さらに、ラクダは砂漠に住むので、ストイックな感じがする一方、そういったとらわれた精神の不毛性も同時に感じ取れる。ラクダのイメージはこうした内容（まだ他にもあるかもしれないが）を一挙に表現しているのである。次の獅子のイメージも、破壊性、高貴、それでいて建設的な仕事には向かないなどのニュアンスがある。ニーチェの研究では動物のイメージ自体についてよりもニーチェ哲学の内容が中心になることが多いが、ニーチェが例えば三段の変化ということは何が言いたかったかは、ラクダや獅子や竜や幼児などのイメージ自体を分析することでよりはっきりすることも多いだろう。その意味で、本論のようなアプローチは、ニーチェの理解にも多少貢献しうらと思う。

朔太郎にもどると、彼の動物のイメージも、それ以外のやり方では表現でき

9) 氷上英廣訳『ツァラトウストラはこう言った』岩波文庫上下（岩波書店、上巻1967年、下巻1970年）を参照した。

ない主観的判断のニュアンスを伝えるという機能を持っている。例えば先ほどの詩人を蛾に見立てた例では、蛾が光に集まるように詩人は「見えざる實在の本質」、つまりアイデアに本能的に引き寄せられるものであり、また蛾がそのことで命を落とすように詩人も現実の生においては悲惨な運命をたどるといった、複雑なニュアンスが表現されていると思われる。それが恐ろしくも憂鬱で、しかも花やかな情緒を呼び起こすわけである。だから今のように説明的に書くよりも蛾のイメージを使った方が、美的効果の点で比べものにならない程優れたものになるのである。

しかし、動物のイメージが朔太郎やニーチェによって使われるのは、もう一つ大きな理由があると思う。彼等は動物のイメージを使うことによって、ステレオタイプの人間性の外側にある何かを表現しようとしているのではないだろうか。そのことを、やはりニーチェに影響を受けた作家である D.H.ロレンスを参照しながら考えてみたい。

(3) D.H.ロレンスの場合との比較

ニーチェは人間は動物と超人との間に架けられた橋であると言った。人間が自分に対して持つイメージは古い偶像のようなもので、人間の中にはそれにおさまりきれない多くのものがある。そのおさまりきれないものの一つが、ロレンスがしばしば動物のイメージによって表現した、人間の動物性である。スコット・サンダースはロレンスに見られる人間の動物性の認識は同時代においては確立されたものではなかったが、フロイトがイドの概念をニーチェからとったように（ニーチェはイドという言葉で、なんであれ我々の本性にあって、非人間的で、いわば自然の法則に従うもの」という意味で使っていたという¹⁰⁾）、全く孤立したものでもなかったと述べている。また、人間が古い偶像のような自己イメージに従っているという認識についても、ロレンスは孤立していなかった。『不死鳥』の中にトゥリガント・バーローの『意識の社会的基礎』という本の書評が収められている。その中でロレンスは次のように書いている。

正常ということについてバーロー博士が説明しているところが、たぶんこの本の最もおもしろい部分であろう。人間は自己に目覚めるとすぐに、自ら

10) Scott Sanders, "Nature vs. Society", Harold Bloom, ed., *D.H. Lawrence's The Rainbow*, (Modern Critical Interpretations) (NY:Chelsea House Publishers, 1988) p. 62.

の姿を描いたのである。それから人間はその画像に従って生き始めた。人類は全体としてあるべき姿を描き出し、各人はその姿に、つまり理想像に従わねばならなかったのだ。

これがわたしたちの文明を支配している偉大なイメージであり偶像である。そしてそれをわたしたちは熱狂的かつ盲目的に崇拝しているのである。これは自己の偶像化である。¹¹⁾

人間は自ら作り出した画像、人間はこうあるべきだというモデルとなるようなイメージに無意識に自分をあてはめてしまう。こうした傾向に対する強い嫌悪と生来の自然や動物に対する興味が、ロレンスの動物のイメージの使い方に反映しているように思う。『アメリカ古典文学研究』で、ロレンスはフェニモア・クーパーを論じながら、彼が心の底ではアメリカの未開地に住むナッティ・バンポーのように、文明社会を離れ、先住民と共に荒野をさまようような自由な暮らしに憧れながら、現実にはフランスの社交界に出入りして「偉大な作家」として妻と共に文明を楽しんでいたと書いている。「偉大な作家」というイメージ、立派な家庭や妻というイメージ、こうしたものをひっくるめてロレンスは「偉大な理想というピン」The pin of the Great Idealに留められていると表現している。¹²⁾クーパーは現実には、こうした理想とされ、押し付けられたイメージを砕いて荒野に飛び出すかわりに、それをおとぎ話のような物語に仕立てたというわけである。

ロレンスの『アメリカ古典文学研究』は、今日でもアメリカ文学の研究者に人気があるが、その魅力は学問的に正確であるかどうかという点にはないように思う。彼はアメリカの作家は、ヨーロッパ人がルネサンス以来たどってきた意識の拡大をさらに押し進め、意識の表面から底にある真の自我へダイビングしていると主張する。¹³⁾こうした変容の過程に注目してクーパー、ポー、メルヴィル、ホイットマンなどの作家を論じ切った点が、極めてユニークで面白い。ロレンスは、自らヨーロッパを脱出して、インド、太平洋の島々、アメリカ、特にニューメキシコの原始的な環境などを旅しながらこの本を書いた。彼の目的も、新しい生の形を友達の芸術家と共に作り出せる場所を見つけることで

11) D・H・ロレンス『不死鳥』上(山口書店、1984年)516頁。

12) D.H.Lawrence, *Studies in Classic American Literature*, The Phoenix edition of D.H.lawrence, vol. 24 (1924 ; London : Heinemann, 1964) p. 44.

13) *ibid.*, chapter 1 , “The Spirit of Place”.

あった。彼は自らをアメリカの作家たちに重ねていたのだろう。

古い人間性から脱出し、新しい生の形へ移行するというこうした変容の過程を、ロレンスはしばしば動物のイメージを媒介にして表現する。中でも蛇のイメージは、よく使われる。例えばクーパー論の中には、蛇の皮脱ぎという動物のイメージが見られる。

The true American, who writhes and writhes like a snake that is long in sloughing. . . . It needs a real desperate recklessness to burst your old skin at last. You simply don't care what happens to you, if you rip yourself in two, so long as you do get out.

It also needs a real belief in the new skin. Otherwise you are likely never to make the effort. Then you go gradually sicken and go rotten and die in the old skin.¹⁴⁾

(真のアメリカ人。彼は皮を脱ぐのに長い時間がかかる蛇のようにのたうちまわるのだ。…最終的に古い皮をおち破るには本当に必死の無謀さが必要だ。皮を抜け出してしまえば、自分を二つに引き裂けばどうなるかという心配など吹き飛ぶものだ。

また、新しい皮を心から信じることも必要だ。そうでなければ努力など決してしそうにない。するとだんだん具合が悪くなって、古い皮の中で腐って死んでしまう。)

ニーチェがラクダ→獅子→幼子の変化として描いた過程を、ロレンスは蛇が古い皮を脱ぎ捨てるというイメージで描いている。人間に対する既存のモデルを壊し、新しい生の形を生み出すプロセスを表現する以上、ステレオタイプの人的イメージ(例えば成長などの)を保持したままで済ますよりも動物のイメージを使う方が効果的だし、自然であると言えよう。朔太郎の気味の悪い動物のイメージも、これと同じ役割を果たしてはいないだろうか。

(4) 卵の殻を破るというイメージ

この「皮を脱ぐ」というイメージと同じく変容の過程を体現した動物のイメージとして、「卵の殻を破る」というものがある。『ツァラトウストラはこう言っ

14) *ibid.*, p. 50.

た』でも、「自己超克」の章で、「しかしあなたがたの立てたもろもろの価値からは、より強い支配力と新しい克服が育ち、大きくなって来る。それによって卵の殻はわれる。」という文がある。朔太郎の詩にも卵が多く出てくる。例えば『月に吠える』の中の「雲雀の巣」の中では、割れた卵のイメージが大きな役割を果たしている。ニーチェの影響を問題にしているわけではない。杉田弘子氏が朔太郎におけるニーチェの影響について書いているところによれば、「『月に吠える』の成立には、ニーチェは直接影響を与えているとは考えられない」という。なぜなら彼が読んで影響を受けた生田長江訳『人間的な余りに人間的な』は大正五年十月に出版され、『月に吠える』出版は六年二月だが、この詩集はそれまで書きためたものを出版したからだという。¹⁵⁾

だが、影響関係ということでは、別の見方もあるようだ。『月に吠える』には「笛」という明らかにニーチェの影響のように見える詩も含まれている。この詩には、思想的なジレンマに陥っている男の「額を、いつのまにか蛇がぎりぎりともきつけてみた」という表現がある。¹⁶⁾この発想は、『ツァラトウストラはこう言った』の中に出てくる、「のどに蛇が這い込んで息がつまる」という印象的なイメージをどうしても連想させる。この詩は大正五年六月に発表されたものである。ニーチェの方ではのどに這いこんだ蛇のイメージは、人間に対する嫌悪と同情にとらえられるという体験の比喩で、それを噛み切るというイメージがそれに続くので朔太郎とは若干異なる。しかし、長江訳を読む以前に朔太郎が『ツァラトウストラはこう言った』の内容を知っていて、少し形を変えて利用したのではないかという推測は成り立つ。久保忠夫氏によると、明治四十四年の長江訳『ツァラトウストラ』を朔太郎が読んでいたことは十分あり得るといえる。¹⁷⁾断言はできないが、『月に吠える』にもニーチェの影響があるように思う。

いずれにしろ、朔太郎の無気味な動物のイメージに、ニーチェやロレンスの場合のように、人間に対する既存のモデルを壊し、新しい生の形を生み出すプロセスを表現するという機能があるかどうか確認するために、長詩「雲雀の巣」を分析してみようと思う。¹⁸⁾

15) 『ニーチェ ツァラトウストラ』有斐閣新書（有斐閣、1980年）269-270頁。

16) 『萩原朔太郎全集』第一巻、99頁。

17) 久保忠夫『萩原朔太郎論』下、日本の近代作家5（塙書房、平成元年）947頁。

18) テキストは『萩原朔太郎全集』第一巻、94-98頁のものを使用。

2 長詩「雲雀の巢」

(1) 卵のイメージに収斂するイメージ群

まずはじめに、語り手の「おれ」が河原を歩いている様子が描かれる。「おれ」は「よにも悲しい心」を抱いて、「ぬすびとのやうに暗くやるせなく」流れる利根川のほとりを歩いている。ポーの「アッシャー家の崩壊」の冒頭を思わせるような、陰鬱な感じの描写である。「おれ」は河原に生えている蓬の草むらの中に雲雀の巢を見つけだすのだが、これらのもの同志や、さらに彼の内面との間に対応関係が見られる。

まず、「おれ」の目に、草の根が「ぼうぼうと」生えているのが見える。このイメージは、四行先の「よもぎの草むら」が「女の髪の毛のやう」に風で動いているというイメージ、および、彼が草むらの中からつかみ出した巢が「干からびた髪の毛」のようだというイメージにつながっている。蓬の草むらは、彼に「恐ろしく不吉なかんがへ」をもたらし、草むらの中の巢をつかみ出す時に、彼は「たましひをつかむやう」にしてつかむ。つまり、女の髪の毛という生々しいイメージと結びついた草むら＝雲雀の巢は、「おれ」の魂の内部の不安感につながるという比喩のネットワークが形成されているのである。

それに加えて、内向性および暑さのイメージ群が見られる。

「おれ」は巢を見つける時、草むらの前に「うづくま」るが、これは草むらの丸い形と同じものである。この丸い形へのこだわりは、次の連で巢が「毬のやうにふくらんだ」という表現があることなどから、偶然ではないと言える。丸い草むらの中に丸い巢があり、その中に丸い卵がある。それを「おれ」が丸くなって見ているわけである。こうした内部へ収斂していくような構造の中心に、動物のイメージ、つまり雲雀の巢とその中の卵がある。このあたりは1で見たような「主観的な体験の表現と動物のイメージが結びつく」（この場合、雲雀自体は鳴き声以外でてこないが）という朔太郎の特徴が現れている。そして「よにも悲しい心」をかかえた「おれ」という人間的形態は、髪の毛、草むら、巢、卵などへと分解されてしまうのである。

また、巢のイメージはバシュラールによれば、「鳥が巢にかえり、羊が小屋にかえるように、人はそこへかえり、そこにかえることを夢みる」もので、家のイメージと似かよったものだ¹⁹⁾。この巢のイメージは、自分の中にある懐かしい感じのする場所へ回帰するという母胎回帰的な含みも持っているの

19) ガストン・バシュラール『空間の詩学』（思潮社、1969年）139頁。

かもしれない。細かいことをいえば、これも人間的な形態からの離脱である。

暑さという点に関しては、「きちがひじみた」太陽に照らされて「ぐつたり汗ばんで」いるとか、「あへぎ苦しむひとが水をもとめる」ように、手をのばして巣をつかむとかいう表現が見られる。

(2) 卵を潰すという出来事

続く連では、「おれ」は巣の中の卵を見つけ、そこに生命的な愛らしさを感じ取るが、それをつまみ上げて太陽に透かしているうちに、つぶしてしまうという出来事が描かれる。

まず気になるのが、「かわいさうな雲雀の巣」を眺めたという表現である。まだ何も起こっていないうちから、なぜ「かわいさう」という形容詞が雲雀の巣につくのだろうか。この比喩は自然ではないが、しかし雲雀の巣＝「おれ」の内面というつながりから言えば、唐突ではないとも言える。なぜなら「おれ」の内面は、悲しく、不安なものだと前の連で述べられているからである。

続く部分は、この詩の中で最も肯定的な感情が見られる部分である。巣は「おれ」の「大きな掌」の上で「毳のやう」にふくらみ、彼は「いとけなく育まれるものの愛に媚びる感覚」を感じとる。彼は「親鳥のやうに」首をのばして中をのぞく。大きな手の中に優しい生命的なものを守るようにのせている「おれ」の姿勢は、保護者としての強さをもつようで、全体として不安で衰弱した感じのこの詩の中では異質である。

しかし、こうした肯定的なイメージは長くは続かない。卵を眺める部分には、「雲雀の巣」が含まれている『月に吠える』によく出てくるような、ほんやりと霞んだようなイメージが連続する。巣の中は「夕暮れ時の光線」のようにほんやりしており、「おれ」は「かほそい植物の繊毛」に触れるような感じを覚える。卵は「ねずみいろ」というほやけた色で、その中身は「うす赤いほんやりしたものが」透けているというものである。

また、この部分には温かさ、ぬるさといった温度の感覚の描写が多く見られる。これは前の連の暑さにあえいでいるイメージとつながるのではないかと思う。「おれ」が摘まみ上げた卵は、「生あつたかい」生物の呼吸を感じさせ、彼は「生ぬるい」不快さを感じ、こうした不快さから「惨虐な罪」が生まれるとある。ここで注目になるのは、温かさ、ぬるさといった温度の感覚と、小さな生命である卵をつぶすという罪とが結びつけられていることである。数行先に卵の内部が「血のかたまりのやうに」透けて見えるとか、「生ぐさい」液体が「じくじくと」流れるのを感じるという生々しい表現があるので、まとめる

とこの詩では、①暑さないし温かさ、ぬるさといった温度の感覚、②生理的な生々しさ、③生命に対する罪、この三つのイメージの系列間につながりが見られるのである。この連の最後に、ねずみ色の卵の表面に赤で書かれたKの文字という謎めいたイメージがあらわれるが、今述べたつながりを考えると、それほど奇妙でもない。Kは‘kill’のことだろう。生々しく、生温かい生命の固まりである卵と、それを殺す罪とが結びつけられているのである。

(3) 「雲雀の巣」に見られる割れた卵のイメージ

この卵を潰すという部分は、人間の原罪というテーマを連想させる。『月に吠える』には、こうした罪の意識を取り上げた詩がいくつかあり、「浄罪詩篇」と呼ばれている。一見するとキリスト教的原罪思想のあらわれともとれるが、久保忠夫氏はこうした「罪」の意識は「原罪」の意識ではなく、自らの人格が卑しいと知りつつそれをどうすることもできないでいるという自責の気持ちであるという。それでも「浄罪」「懺悔」などの言葉は、キリスト教的な響きがあることを、久保氏は付け加えている。そして、「光る地面に竹が生え」で始まる方の「竹」の第一稿の「いと高きところには栄光あれ」や、「竹とその哀傷」中の「卵」の「いと高き梢にありて／ちひさなる卵光り」などの句と、聖書や賛美歌の中の句との類似を指摘し、朔太郎はキリスト教の信者とは言えないが、キリスト教に親しんでいたと言っている。²⁰⁾

久保氏のあげている「卵」という詩は、「雲雀の巣」とよく似たイメージからできている。「ちひさな卵」や「小鳥の巣」が光っており、それに向かって「罪びと」が祈る。²¹⁾この「罪」と、キリスト教との関係を整理するのは難しいが、少なくとも宗教上の教義の絵解きのために、鳥や卵などのイメージが使われているのではないことは明らかである。罪は朔太郎によって内側から感じ取られた認識であり、それは久保氏も強調している彼の孤独感と結びついているように思われる。

さて、ここでの割れた卵のイメージは、1で論じた「卵の殻＝そこから新しい何かがうまれてくる、古い価値観の硬直した殻、特に人間についての認識」を表しているのだろうか。雲雀の卵とそれを取り巻く毳のようにふくらむ巣、うずくまる「おれ」、女の髪の毛のような草むらなどの円のイメージの変奏は、主人公の内部にあって彼に漠然とした不安感を覚えさせる意識の殻のようなもの

20) 久保忠夫『萩原朔太郎論』上、368-376頁。

21) 『萩原朔太郎全集』第一巻、43-44頁。

のを表すと考えてもいいたろう。その中にあるのは生命の暖かみを感じさせるものであり、もしそれが殻をやぶって出てくれば、それは1で論じた三段の変化や蛇の皮脱ぎと同じ内的体験の表現だと言っていいだろう。ここでも卵のイメージ自体は先に述べたような変容の過程を体現するイメージなのである。

「卵」や「春の実体」など幾つかの詩を検討すると、卵のイメージが光るもの、透明なもの、羽をもって飛ぶもの（鳥や蝶）などのイメージと結びついていることが検証できる。つまり、卵のイメージはアイデアの領域につながるものと見なされているのである。

このように卵のイメージ自体は、肯定的な意味を持っている。だが、ここでは「おれ」は卵を潰してしまう。続く第三連では、彼は「愛すべき本能」の現れである卵を潰したことを「悲しみと呪ひとにみちた仕事」と呼び、そこから自分が人間との接触を忌避することを考える。彼は古い殻に孤独に閉じこもって、殻を破って新たな生命を生むプロセスを無意識に拒むのである。とはいえ、この詩は「おれ」が「いぢらしくも雲雀の卵を拾ひあげた」という行為で終わる。彼と変容を体現するイメージとの和解が、十分ではないにせよ達成されたという、比較的肯定的な終わり方である。堀切直人氏によると、この詩が書かれた時期の朔太郎は「生から疎外された、愛に恵まれぬ絶望的な状態」だったが、しばらく後にドストエフスキーの読書をきっかけに、一時的に「生とのまったき和解」に至ったという。²²⁾

おわりに

動物のイメージは、古来様々な文脈で用いられてきた。この論文では、朔太郎の特徴的な動物のイメージの使い方を、ニーチェやロレンスの場合と比較しながら、主観的な内容を表現する場合に動物のイメージを使うことの意味について考えたみた。特に「蛇が皮を脱ぐ」とか「卵の殻を破る」などのイメージは、通常の実在を構成する外観を破ろうと努力する彼等の孤独な試みをうまく表わしていると言える。彼等は、古い皮の中で新しい模様を身にまとう蛇のように、卵の中で殻を破って生まれ出ようとするヒナのように、古い人間性の殻を破ろうとする。こうした作家たちは型にはまった人間性の外側にあるものへ接近するという内的体験を表現するために、動物のイメージを使っているのである。

22) 堀切直人『日本夢文学志』（芸術出版 冥草舎、昭和54年）150頁。